

実験展示の回顧と展望 : さわる五感の挑戦 PART V : 平成22年度実験展示

著者	広瀬 浩二郎
雑誌名	吹田市立博物館博物館だより
巻	42
ページ	1-1
発行年	2010-06-03
URL	http://hdl.handle.net/10502/4811

すいはぼ 博物館だより

No.42

平成22年度実験展示

さわる 五感の挑戦 PART V

会期 平成22年(2010年)6月12日(土)～7月4日(日)

実験展示の回顧と展望

僕たちの生活は視覚に依拠いきよしているといわれる。日本語では「見る」「観る」「視る」などの漢字の使い分けがあるし、英語でも「見る」に当たる単語が多数存在する。これは人類が視覚経験を重視してきたことを示す証拠なのではなかろうか。一方、日本語でも英語でも触覚、「さわる」ことに関する表現は貧弱である。吹田市立博物館の5年間にわたる実験展示では、僕たちが日ごろ忘れがちな触文化の楽しさ、豊かさを再認識することによりミュージアムの新たな可能性、ひいては人間が本来持っている「感覚の多様性」を掘り起こすという壮大な目標を掲げてきた。



本物の縄文土器にさわる
(2010年1月青森県三内丸山遺跡の収蔵庫にて)

最近、僕は「見る」と「さわる」の相違に注目し、なぜ今「さわる」ことが万人にとって必要なかを考えている。「見る」の3要素を「さわる」に応用すれば、触文化の意味を探究できるだろう。3要素とは以下の概念

である。「look」は視線を向けて意図的に見ること(→手線を意識し、大きくさわる)。「see」は自然に見える、目に入ること(→皮膚感覚を研ぎ澄まし、全身を手にしてさわる)。「watch」は注意してものの動きをじっと見ること(→一点に指先を集中し、細部を小さくさわる)。これまでの企画展の展示資料の触学方法を分析すれば、たとえば仏像は「look」、和楽器は「see」、玩具や埴輪は「watch」的なさわり方といえよう。もちろん、3要素は常に混在しているので明確に区分できないし、3要素が縦横無尽じゅうおうむじんに交流するのがミュージアムの醍醐味だいごみでもある。

僕は便宜上べんぎ、視覚で事物を認識することを「見る」と表記している。それに対し、視覚を含め全身の感覚を動員して体感する行為を「みる」と定義したい。企画展で「見るようにさわる」「さわるように見る」鑑賞法かんとくほうを鍛えた僕たちは、いよいよ深くて広い「みる」沃野よくやへと分け入ることになる。博物館を「みる」ためのキーワードは「visualize」(思い描く)である。実験展示は今回で終了するが、「みる」ことへのあくなき挑戦、各来館者の創造力と想像力に根ざす「感覚の対話」が2010年、吹田から始まろうとしている！

(広瀬浩二郎・国立民族学博物館)